

選挙

2007(平成19)年5月15日鑑賞<松竹写真室>

★★★★



監督・製作・撮影・録音・編集=想田和弘そうだかずひろ／出演=山内和彦／山内さゆり／浅野文直／石田康博／石原伸晃／荻原健司／川口順子／小泉純一郎／高尾紀久雄／田中和徳／永井はる子／橋本聖子／松川正二郎／持田文男／矢沢博孝／山際大志郎／山田甫夫（アステア配給／2007年日本、アメリカ映画／120分）

第3章

観終わったら議論したくなる

……ドキュメンタリー映画の中に「観察映画」なる範疇が誕生したが、それは一体ナニ……？ 2005年の「9・11総選挙」は天下分け目の「関が原の戦い」だったが、その直後の10月23日、川崎市では……？ 素人、公募、落下傘というキャラの市会議員立候補者が展開するドブ板選挙の観察は圧巻！ 83.97%というフランスの大統領決選投票の投票率、憲法改正の手続を定めた国民投票法案における最低投票率の議論と対比しながら、ドブ板選挙をじっくりと考え、同時に日本の民主主義の危うさを直視する必要があるのでは……？

「観察映画」とは……？

この映画は、学生時代から短編映画を製作し、1993年からニューヨークに住んで、フィクション映画やドキュメンタリー映画を製作してきたという37歳の想田和弘監督が「観察映画」シリーズ第1作として監督・製作・撮影・録音・編集をした長編ドキュメンタリー映画。

観察の対象は、2005年9月11日の歴史的な衆議院議員総選挙の後、2005年10月14日告示、10月23日投開票された、川崎市議会補欠選挙における山内和彦候補の選挙運動というローカルなもの。

ふつうはドキュメンタリー映画であっても、ナレーションが入ったり、音響効果を狙ったりと、映画としての完成度を指すものだが、この「観察映画」はそういうものは全くなし。したがって勝負は撮影と編集のみにかかってくる。

プレスシートにおける想田和弘監督の説明「Director's Statement」によると、「戦後ニッポンの政治を支配し続けてきた巨大組織・自由民主党。その選挙運動を観察することによって見え隠れする、言葉ではとらえきれない複雑な現実を、観客ひとりひとりが自分なりに感じ取り、解釈してくれることを目指して作った観察映画」とのこと。

さて、想田監督による、この「選挙」の観察によって、あなたには一体何が見えてくるだろうか……？

素人、公募、落下傘

2005年8月8日の参議院本会議において、郵政民営化法案が否決されたことを受けて、小泉純一郎総理の決断によって衆議院の解散、総選挙が実施されたことは、わが国の憲政史に刻まれるべき大事件。そして急遽決まったのが、天下分け目の「関が原の戦い」となった、9・11総選挙。

「小泉劇場」と称されたこの「総選挙」は、さまざまな意味において長く記憶に残る選挙だが、面白いのは、ここではじめて大量の素人候補・公募による自民党公認候補そして落下傘候補が表舞台に登場したこと。かの有名なホリエモンこと堀江貴文もその1人。おバカなマスコミとおバカな選挙民の興味はこればかりに集中したが、小選挙区制度下における総選挙では、素人、公募、落下傘候補であっても、素材さえ良ければ十分勝算あり、と認められたのが、この総選挙の大きな特徴……？

もちろん、小泉チルドレンとして誕生した83名の新人議員が全員、素人、公募、落下傘ではないが、この9・11総選挙によってその流れが加速したことはまちがいない。そうでなければ、その約1カ月後の10・23川崎市議会補欠選挙において、それまで東京で気ままに切手・コイン商を営んでいた「山さん」こと山内和彦(40歳)が、自民党公認の市議会議員候補として立候補することもなければ、晴れて議員バッジをつけることもなかったはず……。

なぜそんな山内和彦を「観察」……？

この映画には、突然立候補した「山さん」を訪ねてきた東大の同級生たちが滞

在するホテルへ、山内和彦とその奥さんの山内さゆりが会いに行く姿が登場する。そしてそこでは、落下傘候補の悲哀と組織選挙の中で振りまわされる「タマ」としての候補者の悲哀が、正直に語られている。そんなシーンを観たうえで、プレスシートを読んでなるほどと思ったのは、想田監督とこの山さんは東大入学当時のクラスメイトだということ……。つまり、2005年10月、ニューヨーク在住の想田監督は別の題材撮影のため日本へ行く準備をしていたところ、出発直前に山さんの立候補を知り、急遽山さんと自民党の許可を得て、この映画の撮影に入ったということだ。

やっぱり東大人脈は強いことを実感……。そしてまた、「公募」とはいても山さんに声をかけてきたのが、自民党衆議院議員の山際大志郎であったことや、東大卒、40歳、小泉純一郎に似たイケメンというだけで、いみじくも山さんが言っていたように、事実上の出来レース……？

議員を選ぶのは難しい……

私は民主主義の価値とそのため負担すべき代償の大きさの必要性について十分理解しているつもりだが、(間接)民主主義を機能させるための議員を良民がどのようにして合理的に選出するのが難しいのが、民主主義の難点……？

その一方の弊害が、いくらアホバカであっても、マスコミを通じて名前と顔が売れていれば当選するという、いわゆるタレント議員の問題。もう1つはそれとは逆に、とにかく組織の言うとおりの真面目に働けば、その人の見識や人格とは無関係に、組織がその人を議員に押し上げてくれるという問題。

前者は選挙民たる国民の良識の問題に帰着するが、後者は「政党」の意義と合わせて考えなければならないから難しいところ。共産党は政党を個人より優位におく典型だし、公明党もそれに近い……。すると、一方では融通無碍と言われ、他方では「人が集まれば派閥があるさ」とうそぶき、合従連衡をくり返しながら、常に権力の中核にいた自民党は……？

ドブ板選挙の是非は……？

選挙では名前と顔を売り込むことが大切なことはよくわかっているが、民主主

義を機能させていくためには、ホントはそれよりも、その人物が議員になればどんな政策を実現するためにどのように動くのか、という方が大切。しかし、いみじくも「山さん」が言っているように、「選挙ではややこしいことを話してもダメ」。なぜなら、誰も聞いてくれないからというのが実情……。

そこで、名前を連呼し、「よろしくお願いします」と頭を下げ、1人でも多くの選挙民と握手をして親しみをもってもらおうという、いかにも日本的な選挙スタイルが定着してきたわけだ。いわく、それをドブ板選挙……。

現在、与党の過半数割れが実現するか否かをめぐって注目されているのが、7月の参議院選挙。それに向けて、小沢一郎民主党代表は地方行脚を続けているが、組織選挙とドブ板選挙は、かつて彼が中枢にいた自民党の方が1枚も2枚も上……？ したがって私は、7月の参議院選挙において、民主党はもっと斬新な選挙戦術を打ち出さなければダメだと考えているが……。

それはともかく、この映画を観れば、自民党流の組織選挙とドブ板選挙の良し悪しが、想田監督の見事な「観察」眼によってすべて明らかになるから、選挙に関心のない若い人たちは是非この映画を観てもらいたいもの。それにしても、こんなドブ板選挙の実態を見ていると、候補に担ぐ方や応援する方も大変だが、担がれた素人の方も大変。こんなにまでして、何のために議員になりたいの？ またならなければならぬの？ 私などは、ついそう思ってしまうが……？

85%の投票率にビックリ……

民主主義が機能しているかどうかのバロメーターは投票率。私は過去、①愛媛大学法文学部、②近畿大学法学部、③関西学院大学法科大学院での「都市法」の講義において、そのことを口を酸っぱくして強調してきた。また友人や依頼者との飲み会においても、議論が白熱してくれば、いつもそんな話になってくる。ところが、ぐっと話が煮詰まり、「君は〇〇の選挙は投票したの？」と聞くと、「実はしていない」という答えが結構あるため、ガッカリすることが多い。

5月14日、憲法改正の手続を定める国民投票法案が成立したが、その論点の1つである最低投票率の議論を聞いていると、日本という国はそこまでダメになってしまったのかと思わざるをえない。もっとも、現実には、国政選挙の投票率は

50%がせいぜいで、地方選挙になると40%を割ることが多いというのは、まさに民主主義の末期症状。

しかも恐いのは、若い人たちの投票率がどんどん減っているのではないかと思うこと。これではいくら18歳以上の国民に選挙権を与えるか否かを議論しても、全く無意味……。民主主義を勝ち取るため、そして選挙権を勝ち取るため、先人たちがどんな苦しい闘いをくり広げてきたのかの勉強が不可欠で、それなしに日本国の再生はありえないこと明らか。

ちなみに、去る5月6日に実施された右派のサルコジ氏かそれとも左派のロワイヤル氏かをめぐって実施されたフランス大統領決選投票の投票率は83.97%。さすが民主主義の国フランスだと大いに感心したが、おバカな日本国民は、こんなフランス人の爪の垢でも煎じて飲む必要があるのでは……？

『州議会』 vs. 『選挙』

プレスシートによれば、想田監督の『選挙』は2007年ベルリン国際映画祭に正式招待され、2月14日、そのフォーラム部門で世界初上映がされたとのこと。そしてベルリンでは、世界の批評家から「一大センセーション」「天才的で凄まじい筆致」「最良のダイレクト・シネマ」「恐ろしくも楽しめる、稀にみる宝」などと大絶賛され、ドキュメンタリー映画の世界的巨匠、フレデリック・ワイズマンとしばしば比較されたとのこと。

と言われても私にはサッパリわからなかったが、ワイズマン監督の『州議会』という映画が同じくフォーラム部門で上映されたため、この日仏の選挙映画(?)が比較・対照されたらしい。たしかにドイツ人の目から見れば、『選挙』における自民党的組織選挙とドブ板選挙の様子は、実に興味深いものだろう。ちなみに、『州議会』はこんな日本的な選挙の様子を観察したものではなく、ほとんど無報酬で州議会議員の仕事をする誇り高い人々を追った映画とのこと……。

ちなみに、プレスシートに収めてあるベルリンでの写真には、肩にたすきをかけ、白手袋でハチマキを巻いた山さんの姿が写っているが、これを見ると、ヨーロッパの人たちやアメリカ人にはひょっとしてテロ集団の実行犯、あるいはかつての神風特攻隊の現代版と見えたのではないかとふと心配も……？

山さんは今……？

川崎市宮前区で市議会議員補欠選挙が行われたのは、同区選出の自民党市会議員が参議院選挙に立候補したために生じた欠員補充のため。その1議席を争ったのは、自民党公認の山内和彦を含む4名の候補者たち。

他方、山内和彦が立候補した時、宮前区には自民党からは既に3人の現職市会議員がいた。したがって、2005年10月の補欠選挙で山内和彦が当選した場合、つい先日行われた2007年春の統一地方選挙においては、再度宮前区から、誰が立候補し、誰が辞退するかという内ゲバが起こること必至(?)という情勢だった。そんな微妙なバランスが想田監督の見事な観察眼によって、スクリーン上にイキイキと描かれている。したがって、「今回に限り」山内候補を応援するという形で、3人の市会議員とその後援会組織が結束したわけだが、1年半後には「昨日の友は今日の敵」となるわけだ。

この映画が公開されようとしている今、2007年春の統一地方選挙は既に終了している。すると、宮前区では一体どうなったの……？ 山内議員は再出馬したの？ そして当選したの……？ そんな疑問はもっともだが、それはあなた自身の興味と責任において調べてもらいたい。なぜなら、それも大切な民主主義の学習だから……。

選挙って面白い……

私が1967年に阪大法学部に入學したとたんに洗礼を受けたのが、自治会のクラス委員の選挙。地方の受験校から都会に出てきた田舎者の私に対して「立候補しろ」とまつりあげたのは、高校時代から政治問題に関心の高い某政党の関係者。大学自治会とは何なのかもロクロクわからないまま立候補し、山内和彦氏と同じような好感度によって(?)当選した私は、以降自治会の委員長・書記長の直接選挙の応援をスタートとして、学生運動の中にドブプリと浸かることに……。

大学卒業後は、1967年の美濃部亮吉都政に続く、1971年の黒田了一府政の誕生にワクワクしたが、各地の革新自治体の誕生はすべて「選挙」から……。また弁護士登録後は、数年毎に実施される大阪弁護士会の副会長や会長選挙、そして日

弁連の会長選挙においてもそれなりの役割を果たしてきた。さらに友人の市議員候補者や府会議員候補者の応援に精を出したり、S氏の大阪市長選挙やK氏の大阪府知事選挙では、私自身が演説台に立ったことも……。

そんな私なりのたくさんの経験の中で言えることは、「選挙って面白い」ということ。もっとも、自分自身でその中に入り、それなりの体験をしない限り、その面白さや充足感・目標達成感はきっと理解できないはず……？ ところが、想田監督の見事な観察眼によるこの『選挙』を観れば、選挙にタッチしたことがない人でも、十分その面白さ(?)を身体で感じるができるのでは……？

てなわけで、世の若者たちは、これからたくさんの「選挙」を当事者として面白く体験していく中で、民主主義とは何かということを学んでもらいたいものだが……。

2007(平成19)年5月16日記

ミニコラム

遂に7・29参院選挙の告示が！

07年7月12日、第21回参議院通常選挙が告示され、29日の投票日に向けて決戦の火蓋が切って落とされた。これは、『選挙』で描かれた川崎市の市会議員補欠選挙とはワケが違い、わが国の行方を決める重大な選択であり、安倍政権への審判となるもの。

その最大の争点は年金だが、私はこれが大いに不満。なぜなら、野党にとっては与党の失策を追及するのは楽しいだろうが、消費税問題を含めた国の財政のあり方や安全保障・外交を含めたあるべき国のかたちの議論の方がも

っと大切なことは明らかだから。そんな難しい議論は国民には理解できないため、よりわかりやすい論点で、という発想がそもそも気に入らないのは私だけ……？ それはともかく、7月13日時点で私なりの大胆予想をすれば、自民党の大敗と与党の過半数割れは確実！ すると、その後は必然的に「政局」となり、衆議院の解散・総選挙そして政界再編という流れになるのは必至……？

2007(平成19)年7月13日